

原爆文学研究会事務局
〒814-0180 福岡市城南区七隈8-19-1
福岡大学人文学部 中野和典研究室内
tel:092-871-6631 (代表) /e-mail:nakanok@fukuoka-u.ac.jp

【修正版】第61回 原爆文学研究会のご案内

時下益々ご清栄のことと存じます。3月28日から延期しておりました第61回原爆文学研究会を下記の要領で開催いたします。今回は新型コロナウイルスの感染拡大を防止するため、本研究会としてははじめて**Web 会議システムを使ってオンラインで研究会を開きます**。皆さまには、ご多忙のことと存じますが、万障お繰り合わせの上ご参加くださいますようお願い申し上げます。

参加をご希望の方は**2020年8月1日（土）**までに「①研究会」「②懇親会」のそれぞれについて参加／不参加を明記して事務局にeメールでお申し込みください。今回は会場による人数制限はありませんが、オンラインでの会を円滑に行うために参加者は原則として本研究会の会員とその紹介者に限らせていただきます。ご参加の申し込みをいただいた方のみミーティングのパスワードなどをお伝えいたします。

記

○ 日時：2020年8月8日（土） 13：00～18：00

○ プログラム

13:00 開会・自己紹介

13:20 松元寛における政治と文学：広島原爆と大学闘争への向き合い方緒論

中村 平

14:40 （休憩 15分）

ワークショップ「〈震災〉と俳句」

14:55 司会から

加島 正浩

15:00 報告1 久保田万太郎と関東大震災

藤田 祐史

15:25 報告2 50年代原爆俳句の射程

樫本 由貴

15:50 報告3 東日本大震災直後、俳句は何を問題にしたか
——御中虫『関揺れる』とは何だったのか——

加島 正浩

16:15 （休憩 15分）

16:30 コメント

中原 豊

16:55 全体討論

17:55 事務局から

18:00 閉会

18:10 懇親会（※懇親会もオンラインで行います。参加費はもちろん無料です。）

【発表要旨】松元寛における政治と文学：広島原爆と大学闘争への向き合い方緒論

中村 平

松元寛（1924－2003年）の打った政治は栗原貞子のそれとどう異なるのか。政治と重なりつつもズレる思想において、それはどうか。松本にせよ栗原にせよ、魅力的であり私に迫ってくるものが、現実との緊張関係の中から文学を生み、論評し、運動を生み出し、政治を打とうとするその力である。日本軍兵士としての戦争体験（「内地」でのもの）、母を失った広島原爆の体験、学生闘争・紛争に広島大学教員として巻き込まれた体験、高度経済成長期とそれ以降における日本社会の体験を含んで、松元は現実と自己の関係性、あるいは自己の位置を問い続け言葉にしようとしてきた。またそこには、1950年代から高校と大学の英語・英文学の教師を長く続けながら、国家を含む大きな制度の「歯車」（同人誌名でもある）とならざるを得ない自分と、明治期に大学教師を辞し小説家になった夏目漱石の姿勢や思想的なものとを、重ねて思考する松元の姿が見える。それでありながら、生まれ、6歳くらいまで住んだ「京城」と朝鮮について、ほとんどと言ってよいくらい記述をものにしていないという不可思議さも、松元は合わせ持っている。本報告では、広大闘争後に書かれた8編の「学園紛争」に関わる中短編小説と、『ヒロシマという思想』などの著作群から、政治と文学の関係性を読み解く緒論としたい。

【趣意文】ワークショップ「〈震災〉と俳句」

加島 正浩

本ワークショップでは、これまでの東日本大震災と〈文学〉を主題とした議論を視野に収めつつ、俳句を題材に取りたい。震災表象を考える際に、各領域でしばしば問題となる〈当事者〉性が、俳句においては、テレビ映像を見ることで詠まれたテレビ俳句の是非や、「励ましの一句」として被災地の〈外側〉で詠まれた俳句の是非として鋭く問題化されてきた。〈内観〉や〈写生〉を句作の基本とする立場からは、被災地に訪れることなしに句を詠むのは適切ではない、あるいは訪れたとしても震災を詠むことは望ましくないとする意見もある。俳句を題材に、震災表象ならびに〈当事者〉性を考察することは、他の〈文学〉ジャンルにおいても有益な示唆を与えうると考える。

また、今回は東日本大震災のみならず、これまでの震災の表象との連続性も考察してみたい。ひとつの震災を詠む際にも、これまでの句を踏まえる俳句という文芸においては、伝統的にどう〈震災〉が詠まれてきたかを理解しておくことが必要になる。たとえば、テレビ俳句においては想望俳句の句やその議論を、福島忌などの新季語の問題は〈震災忌〉や原爆忌を踏まえる必要があるだろう。東日本大震災をそれ以前の文化伝統と接続することで、俳句における震災表象の考察を深めることも目的とする。

今回は、関東大震災、原爆、東日本大震災という三つの事例を取り上げる。それぞれの事例における個別の問題を捉えると同時に、何が連続して引き継がれる課題であるのかを浮き彫りにし、震災表象における〈文学〉の問題を考える一助としたい。